

## 十二宮像と刺絡像

ヨット・M・クナツプ博士

古代占星術上では天體の運行、星辰の運動、位置等の諸現象が地球上の種々の諸現象と結び付けられてゐた。其の中でも人間を大宇宙の映像に譬へた觀方は可成りに重要な位置を占めてゐた。

彼の天空を十二圈に分解する様に人體を十二宮に分ける試みは此の考へ方より來たものである。而して夫には古典及び古典以前の古代に發する諸種の根原があるのである。Sudhoffは其の著せる醫學史(一九一九年刊行)中に刺絡像と十二宮像の區別をして居るが、之は全く適切な事と思はれる。併し氏は始め刺絡像だけが存し之が十二宮像の原型をなしたるものであつた事を忘却してゐる。十二宮像には色々配列を異にしたものがあるが、元來は共通の雛形に依つたもので、即ち天宮の正しい順序を追つて頭部に白羊宮、足部に雙魚宮を配したも

のである。尙ほ配列に變りがあるのは主に胸部であつて、此の部分は普通には首に金牛宮、肩から腕にかけて双子宮、上胸部に巨蟹宮が配され、心臓部に王徵たる獅子宮があてがはれてゐる。夫より以下の部分では何れのものも配列順が共通で、上腹部殊に臍部に處女宮、臀部に天秤宮、恥部に天蝎宮、下肢では大腿部に人馬宮、膝部に磨羯宮、脛骨部に寶瓶宮、足部に双魚宮が配されてゐる。

尙ほ内臓器官に對しても此の十二宮を配したものであるが、之等内臓器官には天體七遊星を配したものの、方が多い。併し又此の七遊星を天體の順を追つて即ち頭に土星、足に月と云ふ具合に人間の全身に配したものもある。火星が今日に於ても尙ほ男子性器部の象徴とされてゐるのは之から來たものである。

又之と對應して人間の精神を七星界に配分する事も行はれてゐた。例へばプロクルスのチモイス註解書中では人間の心靈は恒星界より發して各遊星を経る毎に、其の特色を帯びるものであつて、死後に至つて又夫は失はれるものであ

るべし

又顔面の七孔、即ち五宮に往昔の七遊星を配する事も行はれてゐた。其の他  
 又 *Margarita Philosophica* (Geyer Reisch 1503) に於ける如く人間の四肢及び臓器  
 を十二徴に分ち、更に之を遊星に準じて詳しく七分すると云つた様な事も行は  
 れてゐた。

之は部分的には太古のヘルメス・トリスメギトス書中にも見られる處で、普  
 通に頭部へ白羊宮を配し、右眼に太陽、左眼に月、耳に土星、腦隨部に木星、  
 舌と喉部に雄辨を象徴する水星、嗅官と味官に金星、血液に灼熱せる赤き遊星  
 たる火星が配されてゐる。

テオ・スミルノイスは宇宙に太陽と地球の二中心ある如く、人體に生命の中  
 樞たる心臓と形體との中心たる臍があるとしてゐる。此の事は吾人をして日心  
 説と地心説の行はれ始めた時代及び其の内容に就て回想せしめるものである。  
 彼の人體を宇宙になぞらへて區分し、星辰の影響下に刺絡を行ふのに最適な

體部は圖示した刺絡像をユリアン曆に依る曆制改革を排撃する目的に著したカレンダリウム・ロマヌス(一五一八年)中に詳しく書き示した人はメラנקトン及びセバスチャン・シユンスターの師たる大占星學者ユスチングンのヨハン・ステツフラーであつた。

尙ほ茲に附記しておきたい事は吾人の有してゐる十二宮像及び刺絡像が何れも白羊宮より始まつて十二宮の順に従つたものなる事がある。即ち夫等は悉く白羊宮上に春分點が位し、白羊宮の星座が宇宙の始まりを意味してゐた時代に發してゐる。之は年代で云へば西曆前二二六〇—一〇〇〇年の頃に相當してゐた。而して此の事は此の配列形式が完成された根底を知る事が出来る許りでなく、又今日の占星術者が相變らずに之を利用してゐる事の無意義なる事が知られるのである。

スコラ哲學上から見て、尙ほ矛盾のなかつた占星術的な配列順は少くとも彼の金牛宮時代、即ち春分點が尙ほ金牛宮とに位してゐた時代(紀元前四四二〇

年(ねん)から二二一六〇年(ねん)迄(まで)に發(はつ)してゐる。此(こ)の事(こと)は白(はく)羊(よう)宮(きう)時(じ)代(だい)に於(お)ては充(じゆう)分(ぶん)に理(り)解(かい)せられず時(とき)として(して)は誤(ご)解(かい)され(て)傳(つた)へられ(て)ゐ(た)。金(きん)宮(きう)羊(よう)時(じ)代(だい)の古(ふる)い純(じゆん)粹(すい)の配(はい)列(れつ)圖(ず)は遺(い)感(かん)乍(な)ら今(こん)日(じち)知(し)られ(て)ゐ(ない)。併(しか)し乍(な)ら其(そ)の形(けい)狀(じやう)を(しやう)生(じやう)じた經(けい)路(ろ)は迪(た)り探(たん)つてみる事(こと)が(で)き(る)。又(また)確(かく)證(じやう)する事(こと)も可(か)能(のう)で(あ)る。惟(おも)ふに銀(ぎん)河(が)より發(はつ)した古(ふる)き天(てん)體(たい)像(ざう)や又(また)手(て)を天(てん)宮(きう)上(じやう)に差(さ)し(の)べ(て)ゐ(る)エジ(じ)プト(と)の女(にょ)神(しん)ヌ(ヌ)ート(と)の像(ざう)等(たう)は上(じやう)述(じゆつ)の天(てん)宮(きう)像(ざう)の源(みなもと)を(な)す(も)の(で)あ(る)。尤(も)此(こ)の天(てん)體(たい)像(ざう)は印(いん)度(ど)の(プラ)ジ(ヤ)パ(チ)に於(お)ける如(ごと)くに宗(しゆう)教(きやう)的(てき)表(ひょう)象(じやう)物(ぶつ)と(して)今(こん)日(じち)殘(ざん)存(ぞん)して(ゐ)る(も)の(が)あ(る)。併(しか)し夫(それ)には天(てん)宮(きう)の悉(こころ)くが擧(あ)げられ(て)ゐ(ない)。尙(な)ほ十二(じふに)宮(きう)が人(じん)體(たい)像(ざう)上(じやう)に配(はい)さ(れ)る(に)至(いた)つ(た)の(は)白(はく)羊(よう)宮(きう)時(じ)代(だい)に(い)つ(て)か(ら)の(事(こと)ではある。